

国語の力その5

2024. 7. 31

今まで、主に従来の国語の授業について考えてきた。分かりやすくするために、味わう国語という表現を使った。登場人物の気持ちを考える。作者のメッセージを受け取る。作品を読んだ感想を書く。いずれも、国語の授業で行われていることである。これらを否定しているわけではない。

小学校の国語の授業でのことである。主人公の気持ちを考えたとする。クラスの中には、一度読んだだけで、最初からすばらしい考えを言ってしまう子どもがいる。ときには、先生の上をいく子どももいる。こういった子どもにとっては、その後の授業はつまらないものとなるだろう。

では、数時間の授業を経て、他の子どもたちも、読めるようになるか、読解できるようになるかという、なかなかむずかしい。物語や小説の読み方を指導できる先生は、そう多くはない。これでは、子どもたちのいわばセンスに頼っているようなものである。

学校は、物語や小説、説明文でも、文章が伝える内容にこだわりすぎたのかもしれない。その結果、言葉とその使い方を学ぶという国語本来の目的が、どこかにいってしまったのかもしれない。何が書かれてあるのか、その内容をたどるような授業、文章が伝える道徳的なメッセージを、ああでもない、こうでもない論じ合うような授業などが多かったのではないだろうか。

国語は、何を読むかではなく、どう読むかである。何を書くかではなく、どう書くかである。読む方法、書く方法が重要である。今までは、この方法というものに目がいかなかったのかもしれない。方法が軽視されてきたとも言える。

国語力という言葉を変義したい。世の中では、表現力、コミュニケーション力、読解力、作文力、文章力、語彙力、漢字力、文法力など、そのときそのときで定義されているだろう。どれも間違いではない。だが、どれもが部分的、断片的である。ただし、コミュニケーション力であれば、かなりの部分をとらえている。

では、コミュニケーションのためには何が必要なのか。これこそが、国語力である。国語力の心臓部、それが「論理的思考力」である。書く力、話す力、聞く力、読む力、文法力、これらには、論理的思考力が必要となる。論理的思考力がなければ、これらは機能しない。ここには、語彙力が入っていない。語彙力は、論理の影響を直接には受けない。ただし、論理によって、語彙をより強固にしていくことはできる。

ここまで、この紙面の5号分も使って論じてきた。ここまでが、いわば序論であり、前置きである。次からが本論となる。ようやく本題に入っていく。